

グッドマン論義

片桐ユズル
中尾ハジメ

「グッドマンについてメモをもらってあったけど、やっぱりひとの発想、ひとのルールでは、どうにもうまくまとめられない」

「それがアナーキズムじゃないかい？」

「写真真を否定するね。そういうところから、グッドマンは自分のことをイカケ屋とか、つぎはぎの修理屋だとかいっているが、そういう方法論がおさらグッドマンの思想の全体を見えにくくさせているのか、いつまでたってもめくらがゾウをなでているような感じなんだ」

「でも、めくらならめくらなりに感じるところがあるのだろう。いったいグッドマンのどこがいいのか？」

「まず文章のテクスチャーだな——彼の文章いりくんでいるだろう——表面が一様の材質でなくて、いろんなものがまぎって、しかもびたつと一分のすきもなくできあがっている。ひじょうに具体的でありながら抽象的だということかな——しかもそのあいだを飛躍しないで、一步一步あるいてうめである」

「そのへんはゲシュタルト・セラピーなんだな。おれにとって彼ほど、生きてそこにいる、という実在感を感じさせる著者はいなかった」

「それは彼がひじょうに自覚的だからか？」

「彼は自分の欲望やフラストレーションや抑圧についても知っているわけだ。それで、そういうことをあばいて、ひとをおこらせる一手手前のところまでいく、というんだな。とはいってもふつうの人間にとってはかなりふかいところだよ——だから、わかるうしないのさ。彼自身はもっとふかいところまでいきたいのだけれど、その能力がないこともわかってる」

「もっとふかいところという現象学のひとたちがやってるみたいな？」

「あんまりふかいところになると、ふつうの人間は自分とのかかわりなしにあつかえるから、かえって本はうれたりするかもね。ところがグッドマンは保守派の手あかにまみれたようなことばをいし

と『能力』『愛国心』といったような——これは『不条理に育つ』の目次の一部だが——そういうことばにのみをあたるじゃないか。いわゆる進歩派は、こういうことばは、反動形成で、つかわないものだ。だからグッドマンは、そういう反動形成をさらにこえて、成熟へむかわせる」

「そういう『しごと』とか『信仰』とかいう概念は本来どうして必要なものなのだな。それをさけてとおるから、保守派につけてまわってしまう。ところで、しごとというのは彼の世界のひとつの柱のようにおもう。『あらゆる職業のそれぞれにおいて一〇〇〇〇人が二本足で立ちあがり、言いたいことをいうようになれば、われわれはわれわれの国をとりもどすことができるだろう』ということとで『新しい宗教改革』ではプロフェッションをもったところだが、ばれ、ということもいっている。クリストファー・コードウェルの『幻想と現実』という本は部分的にしかわからないが、わかったところでは、たとえば、アナーキズムは職人のイデオロギーだといっている。グッドマンも、『昔風の恋歌』で、あまりにもしいたげられたひとたちを組織し、長期の努力のために連帯させることはむづかしい、といっている」

「グッドマンについてもうひとつたいせつなことは彼のホモセクシュアルだろう。彼はホモは差別され抑圧されている点では黒人とおなじだといってクリーパーと議論したそうだが、社会に正當にうけいれられない者の視点をもちこは、ふつうでは見えない社会の構造が見えるのではないか」

「彼はジュネを最高に買っている」

「それから彼は自分自身のホモを公言する勇気がある——そのた

めにシカゴ大学やブラック・マウンテン・カレッジをやめなくてはならなかったり、まあ、いろいろあったわけだけど、セックスだけでなく、ひとにみとめられたい欲求とか、いろいろ正直にみとめ、それがみとめられないのはどうしてか——というふうに自分のフラストレーションからいつも出発するわけだ」

「崇高な理想とか、形而上学から出発せずに、自分の動物性からだな」

「うらおもてがないんだな。あるいは、ないように努力しているというか、一致させようとしているというか」

「しごとの強調といい、うらおもてなしといい、じつにプロテスタントだね。ところで、そういうひとのかいた小説というものは、ふつう小説というのはうらの部分をかくものだろう、ところがグッドマンはそういう小説の概念にはいらぬようなものをかくんだな。オールダス・ハクスレーも小説は芸術であるよりもプロパガンダだといふかんがえがあったとおもうんだが、ふたりともおなじことをいながら、たとえばハクスレーはユートピアの『島』のうえをとぶんだ、そして鳥の目で見るところがグッドマンというひとはぜつたいとばない、いつもあるいている、そして五フィート何インチのたかき目で見ている——『メイキング・ドゥー』は、ニューヨーク郊外に一種のコミュニンをつくりかけたはなしで、つまりユートピアを実現させようとする人間が人ごみのなかをあるいている、その目のたかきから見るんだな」

「それがゲシュタルト・セラピーよ。それで一種の日常的神秘主義があるな。あれはクスリをつかわないでハイになる方法だ」

「難行苦行道だろうな」

「もちろん。一九四〇年代末に合州国でアナキストたちはかなりライヒにふかいらして治療をうけたりしていたけど、はじめよくても、しばらくすると、またもどつてしまうことも多かったらしい。ライヒ自身はともかく、弟子たちは肉体のほうばかりやって、こころのほうをなおざりにした、という批判をグッドマンはもったわけだ」

「えらいひとだな、ゲシュタルト・セラピーをはじめたというところで、当時の心理学の専門分野において前衛的なことをしたわけだろう。それから建築という専門分野における『コミュニタス』それから教育史という専門分野における『学者の共同体』——みんなじつに専門的なことだよ。またハクスレーとくらべてみると、ハクスレーはいろんなえらいひとがサロンにいて、彼らの話からいろいろ知識をえて、それをふつうのひとにわかりやすく書きなおすことを自分のしごととかがえていた。ところがグッドマンは自分自身がいくつかの専門でしごとをした——またしても、ハクスレーは鳥の目で見て、グッドマンはあるいている。だけど、いつのまにそれだけの勉強をしたのだろうか？」

「毎日毎日ゆくり一冊づつ読んだのだろうか。『ゲシュタルト・セラピー』に本のよみかたがあるが、速読にはたぶん反対で、消化し、同化しなくてはいけないというんだ。彼は一日ひとつづつ詩をかいて、何千とあるというじゃない」

「ワーズワースだな、あるく詩人、詩もとばず、あるく。だけどよくあるいたな」

「グッドマンは街の人だよ。ニューヨークのすみずみまであるいて知っているんだな」

「彼が死ねば『タイム』の《教育》のページに出るくらいなのに、彼は学校のような人工的環境よりは、街のような環境がしぜんにあたえる教育的効果をかっているね」

「人工ということを信用しないんだ。（人間にはまちがいがつきものだ、というプラチゲマストだ）だからながいこと人類がかつてきょうまでもってきた文化をたいせつにおもっているし、制度などもいっぺんに根こそぎかえてしまうことはできっこないし、反対だ。資本主義であれ社会主義であれ、上からパッサリとくる改革は反対だろう。自分は保守的のアナキストだといっているけど、アナキズムとはマイ・ペースであるきつづけることかな」

■グッドマンの邦訳著作一覽■

『コミュニタス』（榎・松本訳）彰国社

『不条理に育つ』（片桐ユズル訳）平凡社

『新しい宗教改革』（片桐ユズル訳）紀伊国屋書店

『不条理に育つ』1「しごと」片桐ユズル訳（鶴見俊輔編「大衆の時代」平凡社「現代人の思想」7）

『不条理に育つ』4「能力」片桐ユズル訳（秋山清編「権力の拒絶」風媒社）

『人民か人員か』1「応もつともな反論」片桐ユズル訳（佐藤昇編「社会主義の新展開」平凡社「現代人の思想」18）

『アメリカにおける道徳の曖昧性』渡辺武達訳（鶴見俊輔編「アメリカの革命」筑摩書房「現代革命の思想」5）

『昔風の恋歌』片桐ユズル訳 五〇円（千共）（京都市左京区岩倉木野町京都精華短大内 片桐ユズル）以下続刊

ポール・グッドマンを偲ぶ

コーリン・ウォード

第二次大戦中と戦争直後、フリーダム・プレスではアメリカ合州国のアナキストや平和主義者のいくつかの雑誌をずっと配付していた。そのなかには『ホワイ?』、のちの『レジスタンス』、ホリー・キャンティンとダチン・レイナーが編集、印刷した『リポート』、それからドワイト・マクドナルドの『ポリティックス』があった。これらの雑誌は一九五〇年代の冷たい政治的風土と死んだような無関心のうちに消えていった。だが五〇年代末になって、『リベレーション』『デーセント』といった新しい雑誌が現われ、それらとその周辺の人々の間である種の対話が続けられた。

これらの小雑誌で、あるアナキストの発言が目立っていたが、それこそポール・グッドマンだった。ニュー・ハンプシャーで先月彼が死んだのを、非常に多くの人々が悼んだことだろう。彼らの思想や生活への全アプローチは、彼のおかげで豊かにされたからである。グッドマンは一九一一年、ニューヨークのグリニッチ・ヴィレッジで生まれた。まだほんの子供だった頃、父親は家族を棄てた。で、母親は三人の子供を連れて、アパー・イースト・サイドへ移った。そ

こで母親や姉たちは長時間労働し、いつもポールはだれもない家へ帰るのだった。（わたしの母は口うるさい、売子だった、と彼がわたしに言ったことがある。彼女はなにを売ったのかな、とわたしは考えた。彼は昔ながらのユダヤ人小学校と、まさしく選抜制公立中学に相当する学校にはいり、ニューヨークのシティ・カレッジを優秀な成績で卒業した。シティ・カレッジで彼は因習打破を唱えた有名な教師モリス・R・コーヘンの影響を受け、はじめてピョートル・クロポトキンの著作を読み、引きつけられた。

一九三一年、不景気が絶頂に達した時にカレッジを去ったグッドマンは、週給十ドルである映画会社の脚本を読む仕事にありつき、昼間はコロンビア大学の講義に押しかけたりした。哲学の教授リチャード・マッケオンはこの不正規の学生を励まし、彼がシカゴ大学に移った際、グッドマンに教師の仕事を見つけてやった。しばらくの間、彼は哲学博士をめざして働いた。ところが一九四〇年に彼は同性愛の行為のため首にされた。彼がマヌミット進歩主義学校やブラック・マウンテン・カレッジで教えている時にも、同じことが起

こつた。(わたしは同性愛の行ないのために、あるいはその権利の主張のゆえに三度首にされた。……これらの学校は大変リベラルで進歩主義的なものだった。率直にいうと、ラディカルな社会でのわたしの経験では、わたしの自由は許されなかったのだ」と彼は言っていた。けれども、彼が有名になってからは話は違ってきた。「わたしは六つの州立大学で教え、中等学校管理者、州立大学の評議員会、補導教授、非行特別取締班等々の集会の真打弁士として、始終招かれた。……きつとこういう手合いはまったくスクエヤーなので、わたしの行ないを信じないか、あるいはあえて気づこうとしないのかも知れない。さもないければ、もつとありそうなことだが、こういう職業的にスクエヤーな人たちはずっと世馴れていて、人のすることにはあまり注意を払えないのかもしれない……」。

初期の著作

グッドマンの初期の著作——創作、詩、文学批評、映画批評には、それ以降の力強い政治批評、社会批評の手がかりはない。彼の諸活動のなかでこれらを前面に押し出したのは、戦争とそれへの抵抗であった。「わたしは選抜徴兵制に同意しなかったため、刑務所送りとなった。これはわたしの慎重なプリンシプルにも、わたしの願いにも反することだったのだが。わたしの哲学的、政治的立場は、ちよろまかしであった。この頃、ニューヨークのアナキスト・サークルとかかわったことが、グッドマン個人の成長に非常に大きく影響していることはもちろんである。ネッド・ローレムによれば、初期のグッドマンに一番強い影響を与えたのはジャン・コクトー(クロボトキンとは似ても似つかぬたぐい)で、才気に満ちた文士

から社会思想家への変身の特徴づけるのは戦争であった。彼の真摯さと学識は、深く、何気ない、しゃれたやり方で隠されたのだ。これはグッドマン自身の見解ではない。——彼は自分のことを著作家とみなしていた。「わたしは多くの問題について書いているというのは間違いだ。わたしはただ一つ、わたしの知っている、人間がこしらえた風景のなかでの人間しかなない」。

「ホワイ？」と「レジスタンス」の編集者だったデーヴィッド・ヴィックは、最近寄稿した「アナキー」(新シリーズ 八号)で次のように述べている。「一九四〇年代の半ばから末、さらに一九五〇年代初頭にかけて、ニューヨークの若いアナキスト仲間の中で、いくつかの思想が一般に認められるようになった。そのあるものは長いことかかり、時には激しかった討論の末認められたのだった。彼らはこれらの思想を次のように特徴づけている。

「政治的・経済的分散主義。官僚制批判。指導者原理批判(今日なら反エリート主義というところだ)。組織「運動」批判と時に応じた機能集団(今日流にいえば「アド・ホック」「コンスピラシー」)の重視。婦人と子供の解放と平等。共産主義的経済思想(全般的に、だが疑問視するものもあり)。人格主義的個人主義。一種の共同体としての(アナキスト)「運動」。直接行動、可能な場合の工夫をこらした非暴力。徴兵反対と反軍国主義。双方とも帝国主義権力を目ざしているゆえに、冷戦と朝鮮戦争(それ以前の第二次世界大戦)への反対。革命のロマンチックな諸観念に対する批判的態度。一つの定ったイデオロギーとしてより、一つの一般的な志向、生活と行動の哲学、なかんずく一個人の生活の哲学というアナキズムの受けとめ方。『労働者階級』というマルク

ス主義者(とアナルコサンジカリスト)の思想に対する批判。それからもちろん反国家主義、ブルジョアの価値や生き方への批判、反スターリン主義と反レーニン主義、黒人解放の強調等々。アナキスト運動をのぞいてどこにも、このようにけんらんたる思想のきら星をおもわせるものはみられなかった。……」

デーヴィッドはこのきら星が「おどろくほどに」今日の思想状況を先取りしている、と指摘した。たしかにそれは、一九四六年に刊行されたグッドマンの『芸術と社会的自然』に収められた「メイ・パンフレット」を構成する「リトリート」「レジスタンス」「ポリティックス」からの諸論文と現代との関連を説明する。これらの諸論文は一九六〇年に新しい世代のための彼のパンフレット「線を引く」に再録された。

「パンティクス」

一九四七年、兄パーシヴァル(元コロンビア大学建築学教授)と一緒に書いた有名な本が刊行された。『コミュニタス 暮らし方と生き方』(楓・松本訳 彰国社)は、これまでに書かれた都市社会の建築に関する書物のなかでもっとも独創的で想像力に富んだものとして広く認められている。この本は、前世紀の主要な都市計画を順に検討したのち、それに代わるべき人間らしい社会の「理想型」ないしは「模範」を三つ作りだした。第一が有効消費都市である。第二は生産と消費の間の違いの排除。(トーマス・ライナー教授はその著『首都の馴致』でこの本を「そのアナルコサンジカリストの前提を反映した『多核都市』と呼んでいる。第三は最少限の規制で最大限の安全を提供する。第三の計画は半ば真面目、半ば自嘲的に示さ

れており、来たるべきわが社会が直面する、二者択一の選択を要約している。この本はすぐに絶版になり、長い間、ルイス・マンフォードやデーヴィッド・リースマンのような著作家たちに引き続き賞讃され、幻の名著のようになっていたが、一九六〇年にペーパーバックで再刊され、以後、数回刊行された。

「不条理に育つ」

『コミュニタス』は好評だったし、フレデリック・パールズとラルフ・ヘファールリンと共同で『ゲシュタルト・セラピー』を出版したのだが、グッドマンは著作家として暮していくことはできなかった。なお、『ゲシュタルト・セラピー』は一九五一年以来、二〇回版を重ねた(もっとも最近では本年イギリスのサウヴェニール・プレスから出た)。彼が述べているように、その頃、彼は「小作人並みの収入」で家族を養っていた。その後、アイゼンハワー時代末期のアメリカの自己批判の波に乗って、彼は何回か断られたのち、『不条理に育つ』(片桐ユズル訳 平凡社)を本にすることができた。「管理制度下の青年問題」と副題のついたこの非常に重要な本(ゴラシツがイギリスで出版した時には、ほとんどすべての書評家が冷笑したのだが)のために、グッドマンは全アメリカの大家の列に列するようになった。彼はこの地位にあっても少しも墮落せず、気まぐれでいかがい振舞いを加減したり、ラディカルなアナキズムの発言を修正したりはしなかった。(彼のやったことといえばみな、新しい青服を買うことだった)。長年、彼をないがしろにした出版社や編集者が本を出させてくれと彼を悩ませた。それへの答えの一つは、「平和のためのゼネラル・ストライキ」の間、彼の本を出

出版社の事務所にビケを張ることだった。もう一つの答えは（彼がわたしに言ったところでは、日の照るうちに乾草を作れの原理に則って、すぐる十年の間は読者を得られなかったような、アナキズム思想を現代の問題に関連づけた一連の書物を作ることであった。『学者の社会』（一九六二年）は六〇年代後半の学生反乱に先行し、それを予言していた。彼はこの本を「アナキズム理論の小研究」と呼び、クロボトキンの評論『国家』の数節への脚注とみなしうると述べた。『ユートピア風のエッセイと実際の提案』（一九六二年）は、まさしくその題名が示唆しているとおりである。もっとも著者は次のように述べている。「百年前、ラスキンは苦々し気にこう言った。『わたしは彼らに明白な義務を示したのだが、彼らの答えは、わたしの文体には魅力がある、というものだった。わたし自身の経験では、ある実際の提案を、顔に鼻があるくらいはつきりと示した時、人々は失われた楽園を思い出させたといって笑い泣きしたのだ』」。

『義務非教育』（一九六四年）は、今日の経費をくうだけで非能率的な教育制度に代わるものとして、「反学校教育」を提唱した最初の本である。『人民か人員か』（一九六五年）は、分散化に関する包括的な評論である。『ある征服された地方のように。アメリカの道徳的曖昧さ』（一九六七年）は、カナダのラジオ放送で行なった講演シリーズである。そして社会問題に関する彼の最後の書物は『新しい宗教改革』（片桐ユズル訳 紀伊国屋書店）となった。『アナキー』（新シリーズ 四号）にキングズリー・ウィドアーのかなり批判的な批評が載っているが、非常に鋭い洞察を示している。

有名人として

ポール・グッドマンは「有名人」の地位にあがったため、小説や短篇や詩を出版できるようになった。彼はそれらを彼の著作物のなかでもっとも重要なものとみなしていた。彼の評価は間違っていたとわたしは信ずるものだが、たしかに彼が求めていた読者は、アメリカ知識人にとって万能の良心である彼ではなく、一著作家としての彼の読者であった。彼の死の数日後に発行された『ニューヨーク・レビュー・オブ・ブックス』に載った文字通り最後の論文で、彼は次のように述べた。「わたしにとってアナキズムの主要な原則は自由ではなく、自律である。……『わたしの』アナキズムの弱点は、自由を求める欲望が政治変革への強い動機になっているのに、自律がそうでないことだ。自律的な人々は断固として自らを守るが、だがその手段は、さまざまな受動的抵抗をふくめて、それほど熱烈なものではない。彼らはなんらかのやり方で、自分のことをやりぬく。ところが、抑圧された人々の情念は、かりに自由に炸裂しても、どうしたらよいか分からない。自律的でない時、彼らはなにが好ましいか分からない。そして、それを学ぶまえに、辞任を渋るあらたなマネジャーを彼らはもつのだ」。

グッドマンは一市民として、状況とその市民意識から否応なく公けの舞台に立たされ、堂々と活躍した。一九六七年、全国防衛産業協会での演説を頼まれた彼は猛攻撃を加えた。そのため、「礼儀正しく知的な人物」である司会者は、彼を呼んだことを聴衆に陳謝する始末となった。（彼の「軍事・産業複合へのメッセージ」は『フリーダム』と『ピース・ニュース』の付録として再録された。同

じ年、ロンドンで開かれた「解放の弁証法」会議でも演説した。それは同じ名前でベンギン・ブックに入っている（由良君美他訳、せりか書房）が、彼の文章は他のほとんどの寄稿者とは、調子も内容もかなり違っている。六〇年代初期の急進的なアメリカの学生運動で信頼されたのは彼だけだ、ともいわれたが、その後、グッドマンは学生運動の多くの者から、バックナンバー（時期おくれ）、メリオリスト（社会改良主義者）、体制のイカケ屋とみなされるようになった。彼は若者愛していたが、彼としてはアメリカ合州国のニューレフトが取った方向に強く批判的だった。その方向とは、一方ではゲバラ、ホー・チミン、毛沢東崇拜であり、他方では感性の訓練ないしは心霊的経験なのだが、いずれも社会変革に彼らの腕を振るおうとする努力に取って替わるものでない、というのが彼の意見だった。

悲劇的な損失

ロンドンでの会議が終わった数週間後、グッドマンは決して癒えることのない傷をのこした損失を蒙った。二十歳になる彼の息子が登山中の事故で殺されたのだ。マシュー・レディー・グッドマンはもっと若い時分、数年間、ロンドンでわれわれと一緒にいた。彼は内気な人類学の学生だったが、彼の父とおなじように状況に迫られて政治行動と徴兵反対闘争に加わった。彼の父は書いた。

千年が十、それ以上
人々はたがいに殺し合う
いろんな理由で、そのあとでわたしは知る

わたしの息子がどうして失われたかを
暴力のことをわたしに言わないでくれ
ボリビアのゲリラ戦士のことを
わたしのままで称えないでくれ

ポール・グッドマンについて目立つことの一つは、彼が論じたテーマや提案した解決策がその時は省りみられず、最後には公けの問題となるやり方である。彼がひろめはじめた思想はひろく支持されるようになったのだ。十年前、都市の中心部への自動車乗り入れを禁止する必要があると書いた時、それはユートピアの典型のようにみられた。だがその必要はたしかになりつつある。『不条理に育つ』を書いた時、この国の有力な教育雑誌はその書評の見出しに「大西洋のあちら側のたわごと」とつけた。今日、『タイムズ・エデュケーション・サプルメント』の編集者たちはこの本の各命題を真剣に扱うだろう。教育に関する彼の思想はそれと知られず、ますます広い支持を得ている。彼はゲイ・リベレーションの先駆者でさえあった。

ニューヨークのユダヤ人社会は、もっとも創造的な思想家と著作家の多くをアメリカに与えてきたが、その本源的な影響がポール・グッドマン以上に価値ある者は一人もいないだろう。数年前、彼に会った画家のマルク・シャガールはミッツィ・カンリフに語った。「なんとすばらしい男だ。彼に会ってわたしは牧人を見た」と。

（『フリーダム』一九七二年九月一六日号）（大沢正道訳）